

資料

映画「朝鮮の子」スクリプト

板垣竜太[†]

【解題】

映画「朝鮮の子」(1955)のスクリプトを集めた。本号所収の拙論「映画「朝鮮の子」(1955)の製作プロセスをめぐって」の資料編という位置づけになる。

資料1は脚本の〈初稿〉である。原本は縦書き1段組で22頁ある。荒井英郎を中心として1954年12月までにまとめられたバージョンである。梶井陟文庫に所蔵されたものもあると伝えられているが(高柳俊男「資料でたどる枝川町」, 江東・在日朝鮮人の歴史を記録する会編『増補新版 東京のコリアン・タウン 枝川物語』樹花舎, 2004年, p.275), 同文庫を管理する富山大附属図書館には所蔵が確認できていない(一般の単行本・逐次刊行物しかない)。本稿の底本となった脚本の写しには, 手書きで「代田先生」と記されており, もともと代田昇(映画製作当時, 朝教組)が保管していたものである可能性がある。

資料2は脚本の〈改訂稿〉である。原本は縦書き2段組で27頁ある。京極高英を中心に1955年1月に書き換えられたバージョンである。本稿の底本となった脚本の写しには, 2人(またはそれ以上)の字体による書き込みがあるが, 場面32~36にあるものは現場に近い状況でのメモと判断して本稿に反映させ, 残りは反映させなかった。

なお, 資料1・2ともに印刷が鮮明でない箇所が多く, 難読箇所は□で囲い, 推定される文字を補った。

資料3は公開されたバージョンを文字起こししたものである。参照したのは, 総聯映画製作所がVHS形式でビデオ化した映像である。販売年が明記されていないが, 「1954年度作品」と記され「40年ぶりのリバイバル」との宣伝文がついているので, 総聯映画製作所に所蔵されていたフィルムをもとに1994-95年頃にパッケージ化したものだと考えられる。映画を文字起こしするにあたって, 上段にシーン説明や台詞, 下段にナレーションや字幕を配置した。脚本〈改訂稿〉(資料2)と対照しやすいように, 同様の形式で整理したのである。その関係でシーン番号も, 脚本との対応関係が認められるものは同じようにまとめ(シーンの記述も可能な範囲で維持した), 同じ場所で撮影したと思われるものや同じ素材フィルムを使ったと思われるものなどもまとめた。

目次

- 【資料1】「朝鮮の子」脚本〈初稿〉
- 【資料2】「朝鮮の子」脚本〈改訂稿〉
- 【資料3】「朝鮮の子」〈完成版〉文字起こし

[†]同志社大学社会学部教授

*2019年1月7日受付, 2019年1月8日掲載決定

【資料1】「朝鮮の子」脚本〈初稿〉

記録映画

朝鮮の子（全三巻）

記録映画「朝鮮の子」製作委員会

在日朝鮮人学校PTA全国連合会
在日朝鮮人教育者同盟
在日朝鮮映画人集団
東京都立朝鮮人学校教職員組合
東京都立朝鮮人学校生徒自治会連合会
在日朝鮮統一民主戦線中央委員会
在日朝鮮統一民主戦線東京都委員会
在日朝鮮文化団体連合会
東洋映画社

(F・I)

1 朝鮮人小学校の全景

何もない校庭

窓ガラスのこわれた教室の壁に、朝鮮語の答案が、はつてある。

解説

〈これでも小学校だ。ちつぽけで、ぼろぼろで、教室にも校庭にも、なんの設備もない。これは、朝鮮人の小学校だ。

子供たちも、貧乏人が多い――〉

2 勉強している子供たち

その中に金正坤君がいる

(金君のこえ)

『わが家のくらし。都立第二朝鮮人小学校六年 金正坤^{キム・ジョンゴン}。

僕の家は、お父さんはなくなつて、今お母さんとお兄さん、そして僕と弟の四人で、弟は一年生です……』

3 金君の家

金君の弟がお母さんに、だゞをこねている

(金君のこえつゞく)

『弟は学校から帰つておさらいをすませると、すぐお母さんに、お金をくれといつて泣いて大変です。お金をあげないと、地面にすわつて、泣いて動かないので、お母さんがしかたなしに十円あげます。お母さんは、それでお金が一銭もなくなります。』

4 内職をするお母さん

その一生けん命の姿を、ふとんの中から見ている金君

『お母さんは夜おそくまで、ないしょくをしています。僕はその時、ふとんの中で目をあけています。僕はお母さんが、僕たちが生きていけるように、ないしょくをしているのを見ると、ふとんの中で、涙が出てきます。僕はその時、いつも祖国のことを考えます。

祖国では、年とつたおじいさん、おばあさんたちが、仕事をしなくても、ゆつくりねることが出来るのに、日本はどうしてそういうことが、出来ないのかと考えます。』

5 家の前で、金君がお母さんと話している。

『僕はろくまぐで、病院にかよっています。しかし電車賃がないので、いけない日が多いです。お母さんが、お金がないから、今日はいかないでもいい、といいますので、僕はもう病院に行くのをやめるといつたら、お母さんの返事がないので、み上げると、お母さんの顔いろが変つています。こんな時、僕は一生懸命勉強して、りつばな人になつて、お母さんが僕たちを愛してくれた恩がえしをしようと、心の中でお母さんにそう言いたいのですが、その言葉は出ませんでした。』

6 金詢子の家

学校から帰つてきたおねえさんが、赤ん坊をおぶつて出てゆく。

(詢子のこえ)

『わたしのうち。二年 金詢子^{きんすんしよ}

その日はちょうど、おかあさんがはたらきに行く日でした。五年生のおねえさんは、夕方になると、赤ん坊をおんぶして、きんしちようのおみせのところに、おつばいをのませにいきます。』

7 パチンコ景品買いのお母さんが、赤ん坊に乳をのませている。

8 六つの妹と留守番する詢子。

もう、あたりはまつくらだ。

『そのあいだ、六つのいもうととわたくしといつしよに、るすばんをしています。そうすると、だんだんあたりがぐらくなりました。だけれどもでんきがつけられません。六つの子はこわくて、泣き出しました。』

〈まつくらな中で、一心に待つている小さい子供たち。

ここうしてせつせと、働らかなければならない親たち――〉

9 八号地の厩すて場で、寒風に吹かれながら、鉄屑をひろう人たち。

知つた人に見られたくないの、手拭いで顔をかくしているお母さんもある。

10 早朝の赤羽駅付近

屯ろしているかつぎ屋の中に、朝鮮人らしい姿がまじつている。

彼らはやがて、重い袋を背負つて、あたりに気を配りながら、散つてゆく。

11 どぶろくが密造されている。

- 12 警察隊の一せいで急襲で、踏み荒らされた部落。
人だかりの中を、どぶろくのかめがトラックに押収されてゆく。
- 13 バタヤ部落の悲惨な生活ぶり。
〈日本にいる朝鮮人の生活は苦しい。屑ひろい、かつぎや、どぶろくの密造。警察がそれをつぶす。よけい苦しくなる。そして又やる——こういった状態に、朝鮮人を追い込んだものは、一体なんであつたのだろうか〉
- 14 嶺^ヤ山の横つばらに、へばりつくように建つている朝鮮人部落。
〈この人々^(マ)には、戦争中最も安価な労働力として、このやまでこき使われてきた〉
- 15 日本に来た時の思い出を語る部落の朝鮮人。
〈インタビューで——日本の植民地になつた時、土地をとり上げられ、食えなくなつて、みんな日本に出稼ぎにきた話や、戦争中は表で働いていたまゝ、いきなりトラックでつれてこられたとか、手錠をかけられてもつてこられたとか、同じように、徴用という名目で、たくさんの女性が慰安婦にされたというような、悲惨な経験を、この人たちは語ってくれるであろう〉
- 16 同じく部落の母が語る——
〈朝鮮では日常の会話に至るまで、朝鮮語を使つちやいけないと言われ、何の勉強もさせられないで日本に来てまた無学であるがため、いつもドン底に追いつ落されてきた今までの生活と、だからこそ子供だけは、勉強を、それも朝鮮人としての勉強を、どうしてもさせてやりたいという叫び〉
- 17 部落でやつてる青空教室。
(もしやつていれば——)
〈こゝの人々は、日本の敗戦と共に、裸でおつぼり出された。社宅も追われると掘立小屋をつくつて住み、そんな苦しい生活の中から、子供たちの為に青空教室をはじめたのであつた。この人たちはかりではない。戦后日本の各地に、同様なことがおこつた〉
- 18 各地の朝鮮人学校——寺子屋式のものから、農村、離れ島、都会(神戸、大阪、名古屋など)での、いろいろな形をみせて行く。

〈はじめは、寺子屋式のものが多かったが、やがてそこにだけしか帰ることを許されない^{南鮮}が、帰つても暮すことのむずかしい滅茶々々の状態にあると判つた時、学校の経営は本腰となつた。平和な統一された朝鮮が確立されて、帰るその日まで、子供たちを立派な朝鮮人として、育てる学校が——地方の農村から、或は離れ島、大都会の隅に——と、ぞくぞくたてられていった。それはその日の米に事欠く人々が、零細な金と労力をもちより、先生が板をけずつて築きあげた自分たちの学校であつた。〉

19 校庭にか、げられた朝鮮人民共和国の旗。

その朝鮮人学校に加えられた弾圧と、朝鮮人のた、かい。

〈だから、この民族教育の発展に恐怖と悪意を感じ始めた支配階級が、干渉と、圧迫を加えて来た時、子供も大人も、幾度か血を流して、自分たちの学校を守つたのである。一部の学校はついに閉鎖された。日本人の教師だけに切りかえられてしまつた学校もある。〉

20 都庁での、教委とPTA代表との交渉。

21 教委から出された六項目の覚え書。

〈都立学校に移管された東京では、六項目に亘る無理な制限をつけられた。〉

22 先生の居ない教室や廊下にあふれて、自習させられている新人中学生。

〈それによつて、今までの生徒教より増員をみとめない定員制が横行された結果、入学志望者の特に多かつた中学では、三百名の籍のない生徒が生まれ、追い出すことも出来ず、先生も来ないで毎時間、自習をつゞけるといふことさえ起つた。〉

23 民族科目がわずかになつた時間割。

24 日本人の先生がかたまつている一方に、朝鮮人の先生がやはりかたまつている。

〈朝鮮人学校の眼目である民族科目は、課外に押しつけられ、教育用語は日本語、朝鮮人の先生は認められず、わずかに時間講師として、とても生活を維持出来ないような待遇を受けるようになった。〉

25 日本人教師から出された、無理な項目撤廃の嘆願書。

〈民族的な反目をあおるこういった措置をのりこえて、日本人の先生たちからも六項目実施反対の声が上がった。〉

26 都教連の青山先生が語っている。

〈**反対運動に**、いろいろ努力した日教組の青山先生は、語ってくれるだろう。——もしかりに、アメリカ人が日本の子供にアメリカの言葉でアメリカの教育をしてくれたとして、それで「日本人の子供に必要な教育」が行われたとすることができようか。朝鮮人の民族教育に対する圧迫は、同時に、日本の民主的な教育に対する圧迫だ——〉

27 教室で勉強する子供たち。

〈こうして現在全国に百七十七の朝鮮人学級、分校、公立や私立の小学校、中学校、高校が、二万近くの子供たちに、民族教育を曲りなりにも、行なっている。しかし、十二万といわれる就学適齢期の朝鮮児童から言つて、それはわずかな数である。あとの約半分が教育を受けぬ野放しになつており、残りの半分が、日本の小学校へ通っているのである。〉

28 日本の小学校から転校して来た子供が、朝鮮の先生から、入学テストを受けている。

「あなた今度こつちの学校に入りたいんだつてね？」

「はい」

「**田中春子**さんですね」

「え、そうです」

「朝鮮の名前は何というの？」

「……………」

「日本の学校では、国語を習わないでしよう？」

「いいえ、習っています。」

「そう、習っている国語の本はこれでしょう？」（日本語読本を見せる）

「ええ、そうです」

「それでは、こういう本を見たことがありますか」（朝鮮語読本を見せる）

「見たことはありません」

「これどこの国の国語か、知っていますか」

「朝鮮の字です」（下をうつむいて、何となく、もじもじする）

「どうして朝鮮の字であることが、わかるの？」

「うちに朝鮮の新聞がきます。これと字が似ています」

「その新聞は誰が読んでいるの？」

「お父さんが読んでいます」

「あなたは読まないの」

「読めません。字を習ったことがありません」

(この例は第三回教研大会に発表されたもの)

29 その子供が先生につれられて、おすおす教室の方へ歩いて行く。

〈この口頭テストのやりとりの中に、在日朝鮮人の悲痛な歴史と生活が、ひそんでい^(ハ)わしないか〉

30 姜敏子^{カンミンシ}の家の庭

敏子が友達と遊んでいると、おばあさんがくる。

(敏子のこえ)

『私が三年生になつたばかりの春、友達四、五人と庭で遊んでいると、「高ざご」から、おばあさんが来ました。おばあさんは真白な上衣と、地面までとゞく長いスカートに、船の形をした変てこな靴をはいていました。入ってくるなりわからない言葉で、ペチャクチャとし^(ハ)べり始めました……』

友達が、面白がつてまねをする。

近所の子供たちが、大勢集つてくる。

敏子は恥づかしさ一つばいで、部屋に入るなり、押入れに飛びこんでしまう。

『押入れへ入るなり私は泣いてしまいました。はづかしくてたまらなかつたのです。はづかしいやら、きまり悪いやらで、みなの前へ行く勇気が出ませんでした。私は生れて、まだ自分がどこの国の人かということを、考えて見たことはありませんでした。私は朝鮮人だつたのです……』

門に出ている日本名前の表札。

おばあさんが、多勢にとり巻かれて、まだしゃべっているのが、すきまから見える。

『私はあの「高ざご」からきたおばあさんをうらみました。こんないやな出来事をつくつて、あのおばあさんは、ほんとににくらしいと何度思つたかわかりませんでした……』

すきまからのそいている敏子の顔。

『なんで日本人に生まれなかつたんやろ、いやだな、ニンニクくさい朝鮮人なんか……』

31 朝鮮語の発音を習っている教室

敏子の顔も見える。先生はむずかしい発音を、何回もやらせる。

先生「敏子、読んでごらん」

(立つて) 「はい」

先生「はいじゃなくて、朝鮮語で——」

「ネー」

先生「うん、覚えたね。チャリデツソ」(よく出来たの意)、敏子読み始める。

〈朝鮮の先生はいろいろな負い目をもった子供たちに、自分の国の国語、歴史、地理を教えてゆく。それも課外だ。というもの、子供に眼をくばるためには、一日学校にいて、いろいろと面倒を見なければならない。〉

32 先生の下校。ひどいくらしである。

〈時間講師だというので、給与は極めて安い。食うや食わずの生活の中から、先生は一生けん命に、子供たちに教えている。子供たちは次第に学校に楽しさを感じ、自信をもちはじめ。〉

33 子供たちが、熱心に授業をうけている。突然窓外で先生

突然窓外で、先生の声も聞こえなくなってしまうような機関銃の連続音。

生徒たちは、読むのを止めて、まつている。

先生、窓から外をみる。

へい越しに、兵器工場の射場が見える。

〈この学校は、三方も米軍用の兵器工場に囲まれている。機関銃の試射の音が、しょつちゆう授業を中断する。〉

音が止んで、授業が始まる。

と又、やかましい試射の連続音。

眉をひそめる生徒の顔に、朝鮮戦争のはげしい戦いが押しかぶさってくる。

34 教室にはねかえるように、ひびく朝鮮の歌。

声をそろえてうたう子供たち。

35 踊りを習っている。

明るい、楽しい朝鮮の踊り。

36 運動会で澁らつとした子供たち……

〈しかし、民族の固有な生活感情を育くみ、子供たちの明日に希望を与える明るい学校生活は、子供たちをどんどん前進させる。〉

37 部落のお正月風景。

祭祀

白い裳をひるがえしてお母さんたちが飛ぶ、朝鮮独特の板飛び
子供たちの子供会

部落の日本の子供たちも一緒になつて賑やかだ。

〈この部落には日本人が半分位いる。貧しい人たち同士は一緒だ。こういう中で子供たちは、どんなに成長したか。〉

38 教室で一心に勉強する丁栄子

(丁栄子の声)

『毎日々々新しい国語を覚えていく時は、「もうこれで本当の朝鮮の娘になれるのだ」と思うと、嬉しくてたまりません。もう今は、立派な朝鮮の祖国をもち、肉親をもち、「チユン ユン ジャ」という女性の名を持っています。もう私は「朝鮮人」です。立派な、朝鮮の娘なのです。』

確信にみちた丁栄子の顔

39 「三月三十一日で、都立朝鮮人学校廃校決定か。」と大げさに伝える新聞。

40 P T A連合会にあてた、廃校決定を伝える都教育庁の通告文書。

41 そのことをうつたえる掲示。

それを見ている子供たち。

〈昭和二十九年十月、都立朝鮮人学校を三月いつばいで廃校するという都教育庁からの、通告書が、P T A連合会に送られてきた。またはじまつた圧迫。中央での攻撃は、全国への第一歩ではないだろうか。〉

42 教室で、自治会が開かれている。

又昔と同じじゃないか。

都立がいけないなら、私立にして自分たちでやればいい。

そんなことになれば、お金がたくさんいるから、貧乏な人はこられなくなるし、第一学校ができないと思う。

お父さんから、税金ばかりとつて、学校は何もしてくれないなんてあまり勝手だと、議論が百出している。

43 一人の子供が、日本の友だちから来た手紙を、みんなに見せる。

〈子供たちが、戦争反対の平和署名を集めた時、知合いになった日本の子供から手紙がきた。〉

その内容。

朝鮮の学校がなくなるときいて心配している。朝鮮人の学校に対する弾圧は、私たちへの圧迫と同じものだ。それは、みんな戦争へとつながっているのだ、云々

44 寒い朝、白い息を吐きながら校庭でかけ足している子供たち。

その中に鄭相壽君がまじっている。

〈今、やつと得た自分たちの勉強、自分たちの幸福が、うばわれようとしている。子供たちは、そのことを一生けん命に考える。

だが、依然として朝鮮の子供たちをとり巻いているのは、貧しい生活だ。〉

(鄭君のこえ)

『ぼくの家^ちの生活。都立第八朝鮮人学校六年。鄭相壽

ぼくのお母さんは、とつくに死んでしまいました。だから御飯をたく人がいないので、不自由しています。お父さんは毎日安定所に行きます。』

45 鄭君の家、朝。

鄭君が弟たちに御飯を食べさし、父と兄は働きに出てゆく。

46 川原で砂利の仕事をするお父さん。

47 やはり働いている兄さん。

48 夜、ローソクをつけて勉強している鄭君。

『僕の家は電気ありません。ローソクの細々した光で、ぼくはいつも勉強します。』

49 買ったフトンに、顔をうずめて喜ぶ鄭君。

『ある日フトンを四枚買いました。ぼくはその時程うれしかつたことはありません。今までは寒い思いをしてねていましたが、今は唯うれしきでいっぱいです。』

50 天井から雨がもつている。

鄭君傘なしで出かけてゆく。

『家は雨がもりますが、雨が降っても雪が降っても、傘なしに学校に行くのは平気です。』

51 雨の中を、かけ出してゆく鄭君。

『こんなに苦しいのに、もし学校がつぶれたら大変です。僕が一番心配していることは、電気がなくて宿題が出来ないこともあるけれど、私たちの言葉を習う学校がなくなることです。

ぼくはぼくたちが、勉強だけは不自由なしに出来るようこの世の中をつくり上げたいと決心しました。』

52 学校の前。

かけてきた鄭君、友だちの傘の中に飛びこんで、一しよに学校の門を入つてゆく。

(終)

【資料2】「朝鮮の子」脚本〈改訂稿〉

改訂稿

記録映画

朝鮮の子（全三巻）

記録映画「朝鮮の子」製作委員会

在日朝鮮人学校PTA全国連合会
在日朝鮮人教育者同盟
在日朝鮮映画人集団
東京都立朝鮮人学校教職員組合
東京都立朝鮮人学校生徒自治会連合会
在日朝鮮統一民主戦線中央委員会
在日朝鮮統一民主戦線東京都委員会
在日朝鮮文化団体連合
東洋映画会社

タイトル——この映画は朝鮮人学校の子供たちが綴った生活記録であります。

1. 枝川町付近。
朝鮮の子供が登校してゆく
2. 都立第二朝鮮人小学校。
柵のこわれた校庭で、遊んでいる子供たち。
3. 火の気のない寒々とした教室に、子供たちが元気に騒いでいる。
壁にはられたその子供たちの図画。
朝鮮服のお母さん、働いているお父さんなど、生活を描いた画。
4. 窓越しに、枝川町の朝鮮人部落が見える。
5. 三方、水にかこまれた埋立地の部落。
6. 圧迫された朝鮮人の生活を思わせる家々。
様々な生活風景。
出かけて行くおやぢさんたち。
7. 職安。
日本人にまじつた、朝鮮人たち。
係と面接している青年。
「——生れは？」
「……」
「朝鮮の方ですか。」
こうしてそれとなく断られる。
8. ゴミ捨て場。
ダンプ・トラックがはき捨てる塵芥の山。
あちこちに立つゴミ焼きの煙。
9. その灰の中から、ブリキや釘など僅かな鉄屑をあさり出す人々。

〈声 A〉

僕は朝鮮人です。僕たちの学校は東京の枝川町にあります。

枝川町というのは、もとは東京のゴミ捨て場で、人など住めるところではなかつたそうです。それでもお父さんやお母さんは、朝鮮人だということで、こんな所にしか住まわしてもらえなかつたのです。

そして朝鮮人はみんな貧乏です。お父さんたちはみんな仕事をする所がなくて困っています。

どこへ行つても朝鮮人だということでことわられます。朝鮮人はなせこんなことになるのか。僕は不思議です。

まともな仕事がないのです。

鉄拾いやかつぎ屋など、仕事らしくない仕事しかありません。

<p>10. ゴミ／＼と立てこんだバタ屋部落の路地裏で、集めたくずを仕切っている人。路地一ぱいに仕切った荷を積み上げる人。</p>	
<p>11. 駅のホームのかつぎ屋。重い荷を背負って行く朝鮮の女たち。折角の荷を取締りにひつかかってしまう者もある。</p>	
<p>12. 夕暮の道を赤ん坊を背負った少女が行く。</p>	<p>〈別の声〉 私のお母さんはパチンコの景品買いをしています。夕方になると、五年生のお姉さんが赤ちゃんをおんぶしてお母さんの所へおつばいを呑ませに行きます。</p>
<p>13. パチンコ屋の路地裏で、その赤ん坊に乳房をふくませる母親。</p>	
<p>14. 家では電気のつかない、暗い部屋に幼い二人の女の子が親が帰るのを、しょんぼり待っている。</p>	<p>その間、私は六つの妹と留守番をしています。</p>
<p>15. 寝た子供たちの枕もとで内職をつづける母親。</p>	<p>〈別の声〉 僕のお父さんは戦争中、徴用で炭鉱へ連れてこられて働いていましたが、病気になって死んでしまいました。お母さんは毎晩おそくまで手袋の内職をしています。一日やつて四〇円です。そして、お金がないと、よそから借りてきても僕を学校へ出して勉強させようとしています。</p>
<p>16. 第二朝鮮人小学校の教室。 生徒が声を揃えて朝鮮の言葉を習っている。</p>	<p>〈声〉 僕たちは、そうしたお父さんやお母さんたちのおかげで、今までは知らなかった僕たちの国の言葉や地理、歴史を習っています。立派な朝鮮人になるためです。</p>
<p>17. 別の教室。 歴史の時間である。 先生が、日韓併合以来、朝鮮民族から国語を奪い、お父さん、お母さんが朝鮮語を話ただけで罰せられた時代の話をする。 そして、いま、みんなの家で朝鮮語を話しているかどうかと訊く。 一せいに手をあげてこたえる生徒。</p>	

18. 別の教室。
作文の時間。敏子が一生けん命、作文を書いている。

19. 敏子が友達と一緒に学校から帰ってくる。

20. 敏子の家の表。
朝鮮服のおばあさんが来て、朝鮮語でべちやくちやしやべつている。
近所の子供たちが、たかつて、面白がつて真似をしている。

敏子が来る。
なつかしそうに、敏子に話しかけるおばあさん。

いきなり家に飛びこむ敏子。

21. 家の中
敏子、押入れの中へ飛びこむ。

22. 門に出ている日本名前の表札。

23. すき間からのぞいている敏子の顔。

24. 部屋。
押入れの中の敏子に母親が話しかける。
しょんぼりしているおばあさん。

おばあさんが話す

〈別の声〉

私がまだ日本の小学校に通っていた頃のことです。

神戸からおばあさんが来ました。おばあさんは、真白な上衣と、地面までとゞく長いスカートに、船の形をした変てこな靴をはいていました。私の顔を見るとわからない言葉で、ベチヤクチャしやべりはじめました。私はははすかしくて、押入れへ入るなり泣いてしまいました。はずかしいやら、きまり悪いやらで、みなの前へ行く勇気ができませんでした。私は生れてまだ自分がどこの国の人かということを考えてみたことはありませんでした。私は朝鮮人だったのです。

私はあの神戸から来たおばあさんをうらましました。こんないやな出来事を作つて、あのおばあさんは本とに憎らしいと思いました。

なんで、日本人に生まれなかつたのだらう。いやだなあ、ニンニクくさい朝鮮人なんか……。

母親

「……折角、たずねてくれたおばあさんじゃないか。なにが朝鮮語がはずかしいんだね。お前たつて朝鮮人だよ。」

おばあさん。

「そう言うけどね。私も朝鮮人はそりやひどい目にあつたんだよ。私が生れたのはまだ朝鮮が圧迫されていた頃だったが、畑と言つても、少しばかりの畑を持つて、その日その日を食べていたんだよ。その少しばかりの畑も、日本の総督府にとられてしまつて、四日も五日も食べものがなく、なにも食べないで、歩く力もぬけてしまつてね。おなかがすいたら、いろいろにかけてあるおかゆをちびりちびり飲み、そのうちに眠くなつて、寝てしまったものだよ。無論、学校に行けなかつた。

25. 教室。

綴方を読んでいる敏子。

「私は日がたてはたつほど今まで自分の考えてきたことがあまりにもでたらめであつたことに驚きました。私は歴史を学ぶ中で、何故、朝鮮人である私が見知らぬ日本の土地で生れなければならなかつたかを知つたのです。私たちのお父さん、お母さんは決して怠けたために祖国を捨てる身になつたのではなかつたのです。私たちのお父さん、お母さんは故郷が嫌で日本に来たのではなかつたのです。」

十四の年に、徴用にかかつて日本へ渡ることになつたが、日本へ行けば、食べられると思う一心で渡つてきた。だけど朝鮮人じやどこへ行つても駄目だつた。私しや帰りたくて夜になると泣いたもんだ。海の水が氷つてしまつたら、その上を歩いて帰れるのになあと思つたもんだ。」

26. 部屋でおばあさんが話している。

ほんとうにそうだつた。隣の金英培なんざあ、やつと嫁取りをして式をあげている最中に、憲兵が来て、徴用だというのでどこかえ連れて行かれてしまつた。

李ちいさんは田んぼからトラックで連れて行かれたまゝ、帰らなかつた。みんなそうして連れて行かれたんだ。

27. もとの教室。

敏子が作文を読みつゞける。

「私はバカでした。私たちの父母がどんなに苦労をしてきたのかも知らず、朝鮮人とけいべつし、朝鮮人を卑しく考えていたなんて……」

28. 教員室の入口。

お母さんが、女の子を連れて来ていて、先生と話している。

お母さん（朝鮮語で）

「……お父さんは、こんな小さな子を、そんな遠い学校へやるのは可愛想だと言つて反対しましたが、私はどうしても、この子はこちらへお願いしたいと思ひましたんです。遠かろうとどうだろうと、朝鮮の子は朝鮮の学校へあけてやりたいんです。わたしは貧乏で学校へもあがれず、あき目くらで、苦労しましたもので……」

こうして、今まで日本の学校に通つていた子供たちも、どんどん朝鮮の学校へ転校してきました。

と、子供を先生に渡して帰る。

29. 教員室。

その子と先生が話している。入学テストである。

「金子順子さんですね」

「え、そうです」

「朝鮮の名前は何というの？」

「知りません」

「日本の学校では、国語を習わないでしよう？」

「い、え、習っています。」

「そう、習っている国語の本はこれでしょう？」（日本語読本を見せる）

「え、そうです」

「それでは、こういう本を見たことがありますか」（朝鮮語読本を見せる）

「見たことはありません」

「これどこの国の国語か、知っていますか」

「朝鮮の字です」

「どうして朝鮮の字であることが、わかるの？」

「うちに朝鮮の新聞がきます。これと字が似ています」

「その新聞は誰が読んでいるの？」

「お父さんが読んでいます」

「あなたは読まないの」

「読めません。字を習ったことがありません」

30. 別の教室。

元気な声で朝鮮の歌を歌っている生徒。その歌声が全国各地の朝鮮人学校に――

31. 北海道（以下、設立当時の看板を入れて当時の民族教育の姿を各地の特色の中に再現する）

32. 岩手*。

33. 名古屋。

終戦後、朝鮮が日本から解放されて自由になつた時お父さんやお母さんが、苦しい中から家財道具まで売って僕たちのために、小学校や中学校を全国各地に六〇〇も作ったのです。

*手書きで取り消し線が入っており、実際の映像もそのとおりになっている。以下同様。

34. 大 阪。

35. 神 戸。

36. 岡 山。
広島

37. 九 州。

ボタ山が見える朝鮮人部落の一室で、青年が子供を集めて、文字を教えている。

〈同時〉

その子供たちの顔が生き生きと明るい。

38. 夜。

学校へあわただしく走つて行く子供たち。

39. 校庭では父兄や子供が緊張して集つている。

続々とおめかけて来る。

父兄の一人が演壇に立つて話をしていく。

「アメリカ占領軍と日本政府が、われわれの学校を閉鎖せよと命じてきました。日本の義務教育法違反だからと言うのです。しかし、われわれは好んで日本にいるのではない。国交が調整できていないから帰ろうにも帰れないんだ。だから帰りたくても日本政府が帰してくれないんです。

だから帰れる日まで、われわれは子供たちを立派な朝鮮人に育てねばならないんだ。このわれわれの学校をつぶそうというのは、われわれの子供から再び祖国の言葉、祖国の歴史を奪い、民族の誇りを奪つて、祖国を再び植民地につき落とす狙つているのです。

かつて嫌という程味あわされて来たあの暗い朝鮮につきもどされることは到底我慢できません。」

所が、僕たちの学校に大変なことが起きました。

喰いいるように、演壇の人を見つめる子供
の顔。
父兄の顔、顔。

40. 「神戸・大阪事件」(ニユースより)

スーパ一

一九四八・四

神戸・大阪

41. 金太一君の黒袴の写真。

その前で、子供たちが追悼の歌を歌っている。(愛国歌)
歌がつづいて――

42. 朝連解散に伴う学校接収事件。

(ニユースより)

スーパ一

一九四九・九

43. 上十条の中学校襲撃事件。

(ニユースより)

スーパ一

一九五一・三

44. 都教育庁。

集つてきた群衆と警官隊。
一人の老婆が警官にどなっている。
“日本人もアメリカから日本語を使つちやいけないと言われたらくやしだろ。”
一室で、都教委と朝鮮人P・T・Aの人たちが、六項目をめぐつて会談している。
(民戦ニユース)

インサ一ト

六項目の表

45. 街頭で、六項目反対のビラを配つて訴える子供たち。

(民戦ニユースより)

〈声 A〉

僕たちの学校がなくなつては大変です。全
国のお父さんやお母さんが学校を続けること
ができるよう、方々の役所へ頼みに行きまし
た。

この事件で、僕たちの友たちの一人が大阪
でピストルでうたれて死にました。けれど、
日本のおおさんたちも一緒になつて、みんな
の力で学校は守られました。

しかし、僕たちの学校を作つてくれた朝鮮
人連盟が解散させられ、東京の学校は都立に
なつて、学校は朝鮮人の手から日本の手に渡
りました。それからは、ちつとも安心して勉
強できないようなことがあとからあとから起
りました。

しまいには、こんなことまで言つてしまし
た。

それによると、学校の生徒の数がきめられ
て、学校にありがたい子供も、あがれなくな
り、今まで習つてきた朝鮮の言葉や、地理、
歴史も、課外でしか習えなくなるし、先生
も、朝鮮の先生は、本当の先生になれないと
いう差別をうけることになるのです。

P・T・Aのおおさんたちは、ひどく心配し
て何度も何度も話合いました。

僕たちも、じつとしてはいられませんでした。

46. 夜の校庭。
父兄や生徒たちが集っている。
(民戦ニュースより)
- F・I
- F・O
47. 時間表。
民族課目が課外として俄然減らされている。
48. 教室。
日本語の時間である。
日本の先生が日本語で教えている。
49. 夕暮れの教室で美しい朝鮮の歌を歌う生徒。
50. 教室に灯がともり、夕もやをついて学校の歌声が流れてくる。
51. その一軒の家庭。
おぢいさん、おばあさん、近所の子供たちが集って、先生に字を習っている。
- 生徒たちの自治会が開かれている。活潑な討論がづく。
52. 部落にお正月が来る。
楽しい様々な正月風景。
日本の友達と一しよになつて、「ニコニコ会」もひらかれている。
53. 部落の広場では、朝鮮服の子供たちが民族舞踊をおどっている。

けれども、これを受けないと、学校をつぶしてしまうと言うので、とうとう承知しなければなりません。

僕たち朝鮮人はどうして、朝鮮の教育を受けてはいけないのでしょうか。

〈声〉

こうして僕たちの教室からは、朝鮮の課目がすっかり減つてしまいました。

僕たちは、時間がなくて学校では充分覚えなくなつた僕たちの国語を家で習います。

どうして朝鮮の勉強を学校でやつてはいけないのでしょうか。どうしたら僕たちの学校を守れるか、みんなと相談しました。

そうしたらお父さんも先生も、日本の人々と仲良くしなければならないと言いました。それで僕は日本の人々とどうしたら仲良く出来るかというのでいろいろ考えました。その結果、日本の人々と仲良く、けんかをしないで一しよに遊ぶことだと思いました。

僕達のお正月が来ました。

日本のお友達と一しよになつて仲良く遊びました。

部落の人たちが楽しそうに見ている。

僕らの掲示板には、南日外相の対日抗議文がはられている。

54. P.T.Aと教育者同盟、朝教組の会合。
一人が話す。
廊下にまであふれた傍聴の子供やおかみさん。

今度はとうとう廃校の通知がきました。理由は、朝鮮人は外国人だから、日本人が出した税金で教育することができないというのです。

(朝鮮人も東京だけでも十億円にのぼる税金を払っている。朝鮮人も日本人同様、税金を負担している。政府の見解は、義務だけ負わして、権利は許さぬということを示している。それはかりか占領当時、朝鮮人学校を無理に都立に移管したのは外ならぬ都庁だつた。都合が悪くなると今度は廃校というのは虫がよすぎる。われわれは無理を言っているのではない。祖国が統一できて、帰れる日まで廃校は延期してほしいと言っているのだ) という大意。

また一人が言う。

(こうした民族教育に対する弾圧は、祖国の統一独立を阻み、再び朝鮮の植民地化を推し進めようとするものである) という大意。

また一人が言う (日本の先生)

(朝鮮人の問題であるばかりか、日本自身の問題でもある。日本の教育費を削減し、膨大な軍事費に使われていることを見てもそのことが示されている) という大意。

—以上それぞれの大意は極めて簡潔で分り易い言葉にすることが絶対必要。

F・O

F・I
55. まだ晴れやらぬ朝もやのたれこめた寒い朝。
道の水たまりが白く氷りついている。
人影まばらな安全地帯で、数人の朝鮮の生徒たちが、学校へ行く電車を待っている。
寒いので素手をツボンのポケットにつこんで、こきざみに足ぶみしている。
手弁当をさげた労働者も、電車を待っている。
電車が来る。

今日も僕たちは、みんな元気で学校へ通います。

朝早いので、工場へ働きに行く日本のおぢさんたちといつも一しよになります。僕は一年生にあがった時から六年生になるまで、この電車で通つて来たので、顔見知りの人が沢山できました。電車の車掌さんも僕の顔を覚えていてます。ふるい車掌さんは僕が一年生の時からのことをよく知っています。

みんな乗る。

ドアをしめる車掌。

乗り込んだ一人の男の子に話しかける。

「お早う。寒いねえ」

「うん」

「大きくなつたねえ。一年の時はこんな
だつたぜ」

「次は××町、お降りの方はありません
か…… おちさんも朝鮮にいたことある
んだ」

「ふーん。おちさん京城知つてる？」

「いゝところでしょう」

子供たちは、目を輝やかして、次々にま
だ見ぬ祖国のことを根ほり葉ほり聞きは
じめる。

やがて電車が着いて、生徒たち降りる。

「さよなら」

電車チンチンと行つてしまう。

56. 歩き出す生徒。

「寒いなあ（朝鮮語で）」

「走ろうか」

「うん。その方が暖つたかいや」

みんな走り出す。

だだつ広いアスファルトの道を。

大きな建物のかけを。

長い長いコンクリートのへいの角を曲
り、橋を渡つてかけて行く。

かけて行く。

向うの路地からもかけて来る子。

あつちの町かどからもかけて来る。

威勢のいゝ子供たちに、思はず顔をほこ
るはせて、声援をおくる部落の人々。

みんないつか一しよになつて校庭へかけ
こんで来る。

元気ばいの子供たち。

みんな一団になつて校庭をかける。

かける。

ハナ、トゥル、ハナ、トゥル、……

元気のいゝかけ声が校庭を圧する。

みんな一しよに走っていると、段々体が暖
まつてきます。もう寒いなんかなんでもあり
ません！

かけ声は校庭にあふれ、部落に流れてゆく。

部落の掲示板に、都教育庁からの廃校通知がはられてある。

かけ声は、高潮して、その通告文を圧する。

F・O

【資料3】「朝鮮の子」〈完成版〉文字起こし

タイトル1

念のために

この映画が製作された当時は、東京都教育委員会と朝鮮人学校側との間にいろいろと誤解や感情の問題があつて、そのため多少気にさわることもありますが、今ではこのようなことはなくなっています。われわれは一日も早く朝鮮と日本の国交が再開され、両国民の友好と親善が強められることを望んでいます。

タイトル2

この映画は朝鮮人学校の子供たちが綴った生活記録です。

タイトル3 (白い鳩の絵をバックに)

朝鮮の子

(音楽イン)

クレジット (白い鳩の絵をバックに)

製作 在日朝鮮人学校PTA全国連合会

在日朝鮮人教育者同盟

在日朝鮮映画人集団

後援 日本子供を守る会

平和擁護日本委員会

製作担当 李興烈

南日龍

金順明

南萬植

安榮進

鄭太禹

全致五

姜永根

脚本 京極高英

吉見 泰

荒井英郎

丸山喜治

朝鮮映画人集団

演出 荒井英郎

京極高英

呂運珏

林 健

尹孝銀

撮影 大小島嘉二

申光雨

瀬川 浩

録音 安承致
 片山幹男
 音楽 長沢勝俊
 崔東玉
 (朝鮮音楽家協会)
 照明 安田伊三郎
 浅見良二
 文如松
 編集 岩佐寿枝
 守随房子
 安田美佐子

F・O

F・I

- 1 枝川町付近。
朝鮮の子供が登校してゆく
- 2 東京都立第二朝鮮人小学校。
柵のこわれた校庭で、遊んでいる子どもたち。壁に「우리의 말을 사랑하자」のスローガンが見える。
- 3 火の気のない寒々とした教室で、子どもたちが元気に騒いでいる。
壁にはられたその子どもたちの凶画。
朝鮮服のお母さん、働いているお父さんなど、生活を描いた画。
- 4 枝川町の「朝鮮人部落」全景を俯瞰。
- 5 三方、水に囲まれた埋立地の集落（海が見える）。
- 6 バラックの長屋が建ち並ぶ。
朝もやのなか路地を歩く人々。通学する子どもたちも見える。
出かけて行く男性。共同水道で何かを洗っている女性。
- 7 職業安定所。
待合室で日本人に混じって座る朝鮮人たち。
係と面接している青年。

〈声＝男児〉
 僕は朝鮮人です。

僕の学校は東京の枝川町にあります。

枝川町というのは、もとは東京のゴミ捨て場で、人など住めるところではなかったそうです。それでも、朝鮮人はこんな所にしか住まわしてもらえなかったのです。

朝鮮人はみんな貧乏です。お父さんたちは朝早くから仕事を探しに出かけて行きますが、みんな仕事をする所がなくて困っています。

<p>「生まれは？」 「……」 「ああ、朝鮮の方ですか」 「ええ。学校出てから、ずっと仕事なくて困ってます。どんなところでも、何とか」 「学校は？ああ、大学を出ておられるんですね」 「ええ、ちゃんとした仕事がしたいんです。どんな条件でも構いませんから」 「そうですねえ……」</p>	<p>どこへ行っても朝鮮人だと分かると仕事がなかなかありません。朝鮮人はなぜこんなことになるのか。僕は不思議です。</p>
<p>8 塵芥による埋立地「八号地」。 ダンプ・トラックがはき捨てていった塵芥の山。煙がもうもうと立っている。</p>	<p>僕のお母さんは、お父さんが仕事がなく困っているの、毎日八号地のゴミ捨て場に鉄屑を拾いに行きます。</p>
<p>9 その灰の中から、ブリキや釘などわずかな鉄屑をあさり出す人々。</p>	<p>臭いゴミの風に吹かれているお母さんを見ると、僕はお母さんがかわいそうでなりません。早く勉強して、立派な人になって、お母さんに楽をさせたいと思います。</p>
<p>10 それをバタ屋（銅鉄筒）に売って数枚の硬貨をもらう「お母さん」の姿。</p>	<p>〈声Ⅱ女児〉 私のお母さんはパチンコの景品買いをしています。夕方になると、五年生のお姉さんが赤ちゃんをおぶってお母さんのところへおっぱいを呑ませに行きます。</p>
<p>11 「パチンコ日光」の看板。景品買いをしている女性の姿。 夕暮の道を赤ん坊を背負った少女が行く。</p>	<p>そのあいだ、私は六つの妹と留守番をしています。このあいだ、電気屋さんが電気を切っていて、電気がつかないので、暗くなるととても怖くなります。</p>
<p>12 パチンコ屋の路地裏で、その赤ん坊に乳房をふくませる「お母さん」。それをまつ「お姉さん」。</p>	<p>〈声Ⅱ男児〉 僕のお父さんは戦争中、徴用で炭鉱へ連れていかれて働いていましたが、病気になって死んでしまいました。お母さんは毎晩遅くまで手袋の内職をして、僕を学校へ出し、勉強させようとします。</p>
<p>13 家では電気のつかない暗い部屋に幼い二人の女の子が、親が帰るのをしょんぼり待っている。</p>	<p>そのあいだ、私は六つの妹と留守番をしています。このあいだ、電気屋さんが電気を切っていて、電気がつかないので、暗くなるととても怖くなります。</p>
<p>14 寝た子どもたちの枕もとで内職をつづける母親（老眼鏡をかけて縫い物をしている）。父親の遺影が映し出される。</p>	<p>〈声Ⅱ男児〉 僕のお父さんは戦争中、徴用で炭鉱へ連れていかれて働いていましたが、病気になって死んでしまいました。お母さんは毎晩遅くまで手袋の内職をして、僕を学校へ出し、勉強させようとします。</p>

15 教員室の入口。
 お母さんが、女の子を連れて来ていて、
 先生と話している。
 「선생님 저입니다。」
 「저음 뵈겠습니다。」
 「이 애를 먼저부터 조선 학교에 보내려
 고 마음 먹었는데…」
 「네。」
 「학교가 멀어서 일본 학교에 보냈는데
 지금… 오세 생각하면요, 저도 집이 가
 난하기…」
 「네。」
 「…해서 옛날에 공부를 못했기 때문에
 우리 조선 애는 역시나 조선 학교에 보내
 서 조선 교육을 지켜야 된다는 마음이 지
 금 자꾸 나지…」
 「네。」
 「그래 데리고 왔습니다。」
 「아이고, 참…」
 と、先生は、子どもの頭をなでながら、
 「그럼 공부 잘하자。」
 戸の隙間から笑みを浮かべてのぞき込む
 子どもたち。

16 第二朝鮮人小学校の教室。
 生徒が声を揃えて朝鮮の言葉を習ってい
 る。黒板には「우리의 조국 (わたしの
 く)」「조선 나라 (ちようせんのか
 く)」「우리 학교 (わたしたちのかっ
 こう)」と書いてある。
 (児童)「우리 학교」
 (教師)「우리 집」(児)「우리 집」
 (教)「아버지」(児)「아버지」
 (教)「어머니」(児)「어머니」
 (教)「우리 학교」(児)「우리 학교」
 (教)「우리 집」(児)「우리 집」
 (教)「じゃあ一度書いてごらんさい」

17 校庭。音楽にあわせて子どもが「海之歌
 (바다의 노래)」(1948年)を歌
 うなか、体育の授業が映し出される。

(字幕)
 この子を前から
 朝鮮の学校に行かせようと考えて居りました
 が
 こ、は遠いものですから
 日本の学校に行かせておりました
 しかし考えてみると
 私は学校に行けなかったので
 朝鮮語がよめず苦勞しました
 朝鮮の子はやっぱり朝鮮の学校に行つて
 勉強するのが本当です

 よろしく願います

〈声＝男児〉
 僕たちは、お父さんやお母さんたちのおかげ
 で、今までは知らなかつた僕たちの国のこと
 ばや地理、歴史を習っています。

校庭で合唱する子どもたちの姿に映像が切り替わる。

「…뫼를 울려라 뱃머리 돌려라
에헤아디아 뱃머리 돌려
고등어 떼 지어 웅실대는 바다에
저어라 어기여차 달리자 살같이
노젓는 두 팔에 기운이 솟네
어기여차 기운이 솟네」

子どものアップ画像となる。

「에헤아디아 뫼를 울려라
에헤아디아 뫼를 울려라
뫼를 울려라 뱃머리 돌려라
에헤아디아 뱃머리 돌려
고등어 떼 지어 웅실대는 바다에
저어라 어기여차 달리자 살같이
노젓는 두 팔에 기운이 솟네
어기여차 기운이 솟네」

(字幕)

エヘヤ デイヤ 波をけつて
エヘヤ デイヤ 追風うけて
白帆あげろ へさきをまわせ
エヘヤ デイヤ へさきをまわせ
カツオ むれなし ざわめく 海に
こげよ そらこげ 走れ 矢のように
ろをこぐ腕に 力がわくよ
オギヨチャヤ 力がわくよ

18 音楽が切り替わり、映像も記録映画へと変わる。

北海道の大雪のなか登校する児童の姿とともに、札幌朝暉初等学院が映し出される。

〈声＝男児〉

終戦後、朝鮮が日本から解放されて自由になったとき、お父さんやお母さんが、苦しいなかから家財道具まで売って、僕たちのために、小学校や中学校を全国各地に六〇〇も作りました。

19 大阪の御幸森朝鮮小学校の校庭で体操をする子どもたち。教室の風景。

20 神戸の兵庫朝鮮高等学校・神戸朝鮮中学校の校庭で体操をする生徒たち。

21 広島県朝鮮中学校（ハンゲルで「광도현 조선중학교」との看板）。教室の授業風景。

22 福岡。炭鉱のボタ山が見える。子どもらが福岡県筑豊朝鮮人学校に登校する様子。教室で子どもが字を習っている。朝鮮民主主義人民共和国旗がはためく。

僕たちは今まで朝鮮人と言われることがとても嫌でした。何とかして日本人になろうと考えましたが、やっぱりダメでした。しかし先生やお父さんたちの話で、自分は立派な朝鮮人で、朝鮮人が嫌だなんて思っていたことが恥ずかしくなりました。

23 カメラは枝川に戻る。歴史の時間である。男性教師が、朝鮮語で、元上高麗閩係を、皇民化政策と重ねて教える。

「元(元)나라의 쿠빌라이라는 황은 자기의 딸을 고려나라 왕의 왕자한테 시집을 보내 가지고 그를 자기 나라에 데려다 키운 후 우리나라의 실권을 그 양자, 풍습 전부가 원나라의 보습을 받아 가지고 우리나라 정치는 원나라의 정치에 따라서 완전히 종사되고 말았습시다。 이런 일과 일부 사람들이 우리나라에 들어와서 황민화운동은 할 때에 비슷합니다。 즉 一九三九년에 일본 사람들은 우리나라의 우리 학교에 우리 동무들이 있었는데 우리말을 배우지 못하게 했습니다。 그때 학교에서 우리말을 한마디 쓰면 퇴학 당하고 집에 돌아가지서 할머니 할아버지하고 일본말을 모르고 할머니 할아버지한테 우리말을 써서 퇴학을 당합니다。 그 뿐만이니까。 이만큼까지도 창씨개명이라 해서 조선사람들은 죽진 이름을 쓰면 안된다고 일본 이름으로 되는 겁니다。 그러니 지금 동무들의 아버지 어머니가 부르고 있는 가나모리(金森)라 함은 아라이(新井)라 함은 오오시마(大島)라 함은 이거는 전부 그때에 지은 이름입니다。 이런 속에서 동무들 아버지 어머니는 훌륭하게 우리말과 우리말을 지켜왔으며 오늘날 동무들이 이 학교에서 우리말하고 우리말을 공부할 수 있는 것은 아버지 어머니들이 많은 희생을 내면서도 지켜온 덕택입니다。 그러니까 동무들도 동무들 동생이 예쁘게 우리말과 우리글을 배울 것을 생각하고 열심히 공부하여 우리나라 사람이 되…」

朝鮮民主主義人民共和國「愛国歌」のボリウムが上がって声がかき消されるなか、子どもたちの顔がクローズアップで映し出される。

24 別の教室。

作文の時間。黒板に「作文『추억』」(作文『追憶』)と書かれている。移動カメラで教室が映し出される。生徒が一生懸命、作文を書いている。そのうち一人の女子生徒でカメラが止まる。敏子が

(字幕)

昔 朝鮮が元のクビライに支配された時 国の政治はすっかり元の国のいうままになりました 政治や風習までも元の国のまねをさせられました

これは日本が朝鮮を支配していた時と非常に似ています

一九三九年には朝鮮語を学ぶことを禁じられ

朝鮮語を一言しゃべっただけでも退学させられました

家で朝鮮語を使っても罰せられました

それから朝鮮の名前も使つてはいけない事になりました

朝鮮人が全部日本の名前にかえさせられてしまいました

いまお父さんやお母さんがつけている— 金田とか国本とかはその時につけた苗字です しかしお父さんやお母さんたちは

多くの犠牲を払いながらも

祖国の文字と言葉を守つて来ました

皆さんが朝鮮語を習う事が出来るのも

そのおかげです

皆さんもこれから学校へあがる弟や妹が

朝鮮語を習う事が出来るよう

一生懸命勉強しましょう

(字幕)

作文「思い出」

<p>朗読する。 「내가 아직 일본 학교에 다니고 있을 때의 일입니다。」</p>	<p>(字幕) 私がまだ日本の小学校に通っていた頃のことです。</p>
<p>25 敏子が友だちと一緒に学校から帰ってくる。 「학교에서 동무하고 돌아와 보니 집 앞에 사람들이 많이 모여 있었습시다。」</p>	<p>学校からお友達と帰ってくる 家の前に人だかりがしていました</p>
<p>26 敏子の家の妻。近所の子供たちが、たか つて、面白がっている。 「고오베(神戸)에서 할머니가 오셨던 것 입니다。(おばあさんの姿) 할머니는 흰저고리와 땅에까지 닿는 긴 치마에 메 처럼 생긴 이상한 신발을 신고 있었습니 다。」 母「ああ敏子、神戸からおばあさんが見 えたよ。」 祖母「아, 도지코, 많이 컸구나。」 敏子「……」 敏子の友人「あんた 朝鮮人だった の?」 敏子はうつむき、立ち去る。</p>	<p>神戸からおばあさんが来ていたのです おばあさんは真っ白な上衣と長いスカートに 船の形をした変てこな靴をはいていました</p>
<p>27 家の裏口で一人たたずむ敏子。 「나는 부끄러워서 그만 뒷문쪽으로 가 서 울고 말았습시다。(カバンに付く 「金田敏子」という名札) 나는 아직까 지 자기가 어디 나라 사람인지 잘 생각해 본 일이 없었습시다。나는 조선 사람이 었던 것입니다。나는 이런 일을 만들어 놓은 그 할머니를 미워했습니다。ニンニ クくさい朝鮮人なんか! 왜 나는 일본 사람으로 태어나지 않았을까。」</p>	<p>私はみんなの前にいるのがはずかしく 裏ににげて行くなり泣いてしまいました 私は生れてまだ自分がどこの国の人かという ことを 考えてみたことがありませんでした 私は 朝鮮人だったのです 私は神戸から来たおばあさんをうらみました いやだ! ニンニクくさい朝鮮人なんか! なんで私は日本人に生れなかったのだろう</p>
<p>28 部屋。しよんぼりしているおばあさん。 母親が話しかける。 「せつかく、おばあさんが訪ねてきてく れたのに、朝鮮語は何が恥ずかしいんだ ね。너도 조선 사람 아니냐!」 おばあさんが話す。</p>	<p>お前だって朝鮮人だよ!</p>

「대 재웠을 때 조선은 아담이 나서 본말
은 일해야 많지 않고 얼마 안되는 것을
그날그날 생활해 나가다가 그그러나 길
에 뛰 뛰어 먹고 충북부에 뺏겨 버리고
말았어. 뺏겨 버리고 살길이 없이 사흘
나를 굶어서 결암을 걸으니 쓰러지고 만
∴ 끝이 없이 자식을 따라 일본으로 가자
하니 학교는 문 앞에도 못 가보고, 그리
나 끝이 없이 자식을 따라 일본으로 건너
와 보니 조선 사람이기 때문에 조선이나
일본이나 마찬가지라. 밤으로 자라고 누우
니 주룩주룩 많이 오고 울기만 하다가 저
바닷물이 얼린 걸어서나마 조진을 가겠
다고 울기만 했단다。」

子供にはなんの罪もないよ みんなそんな考
えになってしまったんだよ
わたしの若い時は
朝鮮はひどい目にあつてね
私の家も少しばかりの畑で
やつとその日その日を暮らしていたんだよ
その畑も 日本 総督府にとられてしまい
食べ物がなく歩く力も抜けて
四日も五日も寝ている日が続いてね
日本へ行けば食べられると思う一心で
息子の後を追って日本へ来たけれど――
朝鮮人はどこへ行っても
皆なひどい暮しだった
わたしはいつも
泣いてばかりいた
もし 海の水が凍ったら
歩いてでも朝鮮は帰りたいと思つてね――

29 教室。

綴方を読んでいる敏子。
「나는 날이 가면 갈수록 지금까지의 자
기 생각이 얼마나 틀린 생각이냐 알게 되
었습니다. 나는 역사를 배우는 가운데서
조선사람인 내가 왜 낯설은 일본 땅에서
태어나지 않으면 안 되었는가를 알았습
니다。」

私は今まで考えてきた事が
あまりにもでたらめであつたのに驚きました
何故 朝鮮人である私が
見知らぬ日本の土地で
生れなければならなかつたかを知りました

30 部屋でおばあさんが話している。

「정말 그렇지 않다. 이웃에 살던 김영
배는 차가를 가는데 내리쳐서 징용이라
고 헌병이 와서 다리가고, 이 서방은 밭
에서 일하는 것을 도라크로 실어가고 모
뎃을 다 그렇게 다려가고 말았어。」

本當に朝鮮人はひどい目にあつた
隣の金さんは嫁取りの晩に
日本の憲兵がきて
徴用だといつて連れて行かれ――
李おしさんは野良で働いている所を
トラックで連れて行かれた
皆んなそうして連れて行かれたもんだ

31 もとの教室。

敏子が作文を読みつつける。
「우리들의 어머니 아버지들은 결코 계
울려서 조국을 버리게 된 것이 아니었습
니다. 어머니 아버지는 고향이 싫어져서
일본에 온 적은 아니었습니다. 나는 마
보였습니다. 우리들의 부모님이 얼마나
고생을 해 왔는지도 모르고 조선사람을
엮장머리고 조선사람을 친하게 여겨왔다

私たちの父母は 決して怠けたために祖國を
捨てたのではなかつた
決して祖國が嫌で日本に来たのではなかつた
私は馬鹿でした
父や母がどんなに苦勞をしてきたのかも知ら
ず 朝鮮人をいへつし いやしく考えてい
たなんて――

<p>り… くり… くり… くり…」</p> <p>教師と敎友が拍手を送る。涙顔だった敏子に笑みが浮かぶ。</p> <p style="text-align: right;">F・O</p>	<p>私は… 私は…</p>
<p>32 F・I</p> <p>校庭（東京朝鮮中高級学校か）では父兄や子供が緊張して集っている記録映像。続々とつめかけて来る。</p>	<p>〈声＝男児〉</p> <p>学校に大変なことが起こりました。日本の役所が僕たちの学校はやっちゃいけないと言ってきました。</p>
<p>33 阪神教育闘争の新聞記事</p>	<p>全国のお父さんやお母さんが、学校をそのまま続けることができるように、方々の役所へ頼みに行きました。</p>
<p>34 金太一の黒枠の写真。</p> <p>講堂での集会で金太一の黒枠の遺影をもつ母親。その母親が表彰状を受け取る。</p>	<p>この時、僕たちの友だちが、大阪でおまわりさんにピストルで撃たれて死にました。けれど、日本のおしさんたちも一緒になって、みんなの力で学校を守りました。</p>
<p>35 トラックに乗る警官。</p> <p>朝連解散に伴い東京の朝聯中央会館が接収される。</p>	<p>しかし、それからすぐ僕たちの学校を作ってくれた朝鮮人連盟が解散させられてしまいました。</p>
<p>36 雨のなか「学校閉鎖措置反対」と貼り紙がされた施設に入っていく人々。</p> <p>校庭の生徒らがスクラムを組んで学校を守ろうとしている。後ろの校舎の壁には「김태일 동무의 빛나는 회생을 상기하며 오늘 투쟁에 총권기 하라!」というスローガンが掲げられている。</p> <p>声明文を読み上げる人もいる。</p> <p>警官が校舎に「昭和二十三年政令第二百三十八号に依る接収財産につき立入を禁止する 昭和二十四年十月十九日」の貼り紙を貼り付け、朝鮮語のスローガンを剥がす。</p>	<p>僕たちは一生懸命反対しました。しかし学校は日本の役所に取り上げられてしまいました。</p>
<p>37 共和国旗のもとで反対集会をおこなう人々。</p> <p>マイクの前で演説する人。</p> <p>都教委と朝鮮人とのあいだの交渉。</p>	<p>それから東京の学校は都立になりましたが、ちつとも安心して勉強ができないようなことが、あとからあとから起きました。今度は学校の生徒の数が決められました。だから、学校に上がりたい子どもも上がれなくなり、そ</p>

38 街頭でピアノを配って訴える子どもたち。

39 集ってきた群衆と警官隊。
一人の女性が警官にとなる。
「お前たち日本人だって、アメリカから日本語を習っちゃいけないと言われたらくやしいだろ。朝鮮人が朝鮮語を習っちゃいけないとは何だ！」
排除される群衆

40 東京都立朝鮮人小学校。日本人の男性教師が社会科を教えている。活気を失ったように見える教室。
「じゃあ、先生が一回読むから、静かに聞いていなさい。
国会。東京都の中央、千代田区の高台にそびえ立つ純白の大建築。それは国民の代表者である国会議員が国の政治について討議する国会議事堂です。そのまん中にそそり立つ高い塔は、国民の高い理想を示し、正しい政治のあり方を表すものとして、国民は国会に深い期待をかけています。向かって左側の建物が衆議院で、右側が参議院です。」

41 夕暮れの学校。課外の時間。
教室で男性教師のピアノの伴奏に合わせて朝鮮の歌「봄이 왔네 (春が来た)」を歌う。

42 家々に灯がともり、最高人民会議呼訴文(一九五四・一〇・三〇)を伝えるラジオの音が薄く聞こえてくる。
「朝鮮の平和的統一のため、南北朝鮮代表者会議を開こうとのアピールは、日本での残留朝鮮人… (音楽の音にかき消さ

のうえ朝鮮の勉強は課外になってしまいました。PTAのおじさんたちは、心配して何度も話し合いました。

僕たちも、じつとしてはいられませんでした。たくさんの方の人たちに、僕たちの学校のことを知ってもらおうと、街に出かけて行きました。僕たちはどうして朝鮮の教育を受けてはいけないのでしょうか。

みんなで一生懸命反対しましたが、これを見ないと学校をつぶしてしまうと言うので、とうとう承知しなければなりませんでした。

それから僕たちの教室から朝鮮の課目がすっかり減って、日本の学校と変わらなくなりました。

〈声 II 女児〉
私は、いつも学校が終わってから、先生と一緒にみんなで歌を歌います。私は朝鮮の歌が大好きです。

<p>れて聞きとれない〕…では日本のみなさま、明日のこの時間まで、ごきげんよう、さようなら。こちらは朝鮮中央放送局、こちらは平壤です。」</p> <p>43 その一軒の家庭。 大人の女性たちや、近所の子どもたちが集って、先生からハングルを習っている。</p> <p>大人と子どもが声を揃えて「ㄱ」 「ㄷ」 「ㄹ」の字を読み上げている。</p> <p>枝川を歩く子どもたち。「江東 朝鮮人生活協同組合売店」の看板が見える。</p> <p>「ぼくたちの学校のことで、みんなでそうだししましょう。2じ 6ねんのきょうしつ」と貼り紙されている。</p> <p>教室で子どもたちが相談している。</p>	<p>〈声＝女兒〉</p> <p>学校では時間がなくてたくさん習えない朝鮮の字と読み方を、うちで習っています。お母さんやおばあさんたちも集まってきた、勉強しています。とても楽しいです。</p> <p>〈声＝男児〉</p> <p>僕はいつも考えます。どうしたら僕たちの学校を守っていけるのだろうか。僕は先生やお父さんに相談しました。そうしたら、日本の人々と仲よくしなくてはいけないと言いました。それでどうしたら仲よくできるかみんなと相談したら、けんかをしないで仲よく一緒に遊ぶことだと、答えが出ました。</p>
<p>44 正月が来る。</p> <p>「新年子供会―馬込ニコニコ子供会 1955」が開かれている。</p> <p>舞台上、東京都立第六朝鮮人小学校の子らが合唱「のらへ行こう (진흥명의 노래)」、馬込第一小学校の子らが人形芝居「豚かいと羊かい」を披露している。</p> <p>にこやかに観賞する子どもたち。</p>	<p>僕たちのお正月が来ました。</p> <p>日本のお友だちを呼んで、ニコニコ会を開いて、仲よく遊びました。</p>
<p>45 校庭らしき広場で、朝鮮服の女性たちたちが民族舞踊を披露している。</p> <p>朝鮮の人々が楽しそうに見ている。</p> <p>建物には「独立と平和」と日本語で大きく掲げられている。</p> <p>掲示板には、南日外相の対日抗議文「日本に居住する朝鮮人に対する日本政府の不法な迫害に反対、抗議して」(一九五〇・八・三〇)の日本語要旨が貼られている。</p>	
<p>46 東京都教育委員会教育長から都立朝鮮人学校 P・T・A 連合会理事長に宛てた「都立朝鮮人学校廃校措置について」</p>	<p>〈声＝男児〉</p> <p>また困ったことが起こりました。</p>

(一九五四・一〇・五付)が映し出される。「第三回 足立日・朝懇談会」の映像。PTA、母の会、朝教祖および足立区労協等の日本人関係者らが集まって、「郡立朝鮮人学校廃校通告の件」と「足立日・朝友好促進準備会規約審議の件」を話し合っている。

一人の朝鮮人男性が訴える。

「東京都教育庁は都民の血税を朝鮮人学校に使うべきでないと言うし、また一部の日本人方もそう誤解されておりますが、われわれ都内の朝鮮人だけでも十億円、毎年十億円以上の税金を納めております。だから、朝鮮人学校に一年の経費七千万円くらいの教育費をもらうのは、当然の権利ではないでしょうか。」

47 一枚の布団で親子が寝ている。
ロウソクの灯りで勉強する男児。

48 寒い朝。都電の通る道。
乗り場で子どもたちが電車を待っている。

電車が来る。乗り込む子どもたち。通勤客らしき人が数多く乗っている。

車掌が、「月島行き」で次の駅が「門前仲町」であると伝える。

車掌が子どもらに話しかける。

「おはよう。寒いなあ」

「うん」

「ああ大きくなった。一年生のときはこのくらいだったよ。みんな大きくなった。今度は朝鮮の学校、ダメになるんだってな」

「うん」

「困ったことになったな。おじさんも朝鮮にいたことあるんだぜ」

「本当？」

「本当だい」

今度は、朝鮮人は外国人だから、日本の税金で教育することはできないと言うのです。お父さんや先生も心配して、毎日相談しています。日本のおじさんたちや日本の先生も、集まって来てくれました。

〈声Ⅱ男児〉

僕のうちは布団も電気もありません。ロウソクで僕はいつも勉強します。僕が一番心配していることは、電気がなくて宿題ができないこともあるけれど、僕たちの言葉を習う学校が無くなることです。

〈声Ⅱ女児〉

私の近くには朝鮮人学校がないので、電車に乗って行きます。朝早いので、工場へ働きに行く日本のおじさんたちといつも一緒になります。私は一年生から六年生になるまで、電車で通ってきたので、電車の車掌さんも古い人は私たちの顔を覚えています。

「じゃあ京城知ってる？」
 「知ってるさ」
 「平壤知ってる？」
 「うん。おじさん、兵隊に七年も取られ
 ちゃったい」
 「釜山の港、大きい？」
 「うん」
 「鴨緑江知ってる？」
 「うん」
 「漢江でかい？」
 「うん」
 「本当？」
 「本当だよ」
 「大きな山、いっぱいある？」
 やがて電車が到着する。子どもたちが降
 り、電車が過ぎ去る。

49 まとまって歩く子どもたち。

「아-춥다。」
 「뛰어갈까。」
 声をそろえて「응, 뛰어가자!」
 「뛰자!」
 「뛰면 춥지 않아。」
 みんな走り出す。
 途中、米軍が医薬品貯蔵庫として使っ
 いた商船大塚、倉庫貨物線の線路、など
 を通過しながら走る。
 「하하, 뿔, 하하, 뿔, 하하, 뿔, 하
 하, 뿔, 하하, 뿔, 하하, 뿔, …」
 水った水たまりを割りながら、子どもた
 ちが次々に合流してくる。
 「하하, 뿔, 하하, 뿔, 하하, 뿔, …」
 町井銅鉄商店を通り過ぎるころ、子ども
 たちは「おーい」と声をあげる。

一団となって校庭に入っていく。
 「하하, 뿔, 하하, 뿔, 하하, 뿔, …」

〈声＝女児〉

五年生のヨンギリを先頭に学校まで走り出
 しました。

みんなと一緒に走っていると、だんだん体が
 暖まってきました。もう寒くも何ともなくな
 りました。

〈声＝男児〉

僕たちのうちがいくら苦しくても、僕たちの
 ことばを習う学校がなくなれば、朝鮮人が朝
 鮮語を知らないへんてこな人間になってしま
 います。僕たちは祖国に帰れる日まで、朝鮮
 のことばを勉強して、僕たちの学校を守って
 いきたいと思います。

既に校庭で遊んでいた子どもたちも、その行列に合流する。子どもたちが輪になって校庭を駆けまわる。音楽盛り上がる。

タイトル「朝鮮の子 終」

F・O